

形容詞の無標性と言語転移容認度の関係についての研究

A Study on the Relations between Unmarkedness of Adjectives and Language Transferability

青谷 法子

Noriko AOTANI

キーワード：言語転移容認度、有標性、心的語彙、類推

Key words : language transferability, unmarkedness, mental lexicon, analogy

要約

本研究では、青谷(2008)での知見から得られた仮説に基づき、測定可能な数量に関連する形容詞対「深いー浅い」、「広いー狭い」、「明るいー暗い」、「強いー弱い」について、それらを含む日本語の表現が英語にも適用できるかどうか、その転移容認度について調査を行い、無標形容詞を使った表現の方が有標形容詞を使った表現よりも転移容認度が高いかどうかの検証を行なった。日本人英語学習者 164 名を 2 グループに分け、ひとつのグループには無標形容詞を含む 20 通りの表現を、もうひとつのグループには有標形容詞を含む 20 通りの表現を提示し、英語への転移容認度を測定した。

提示した 20 対の表現のうち、無標形容詞が有標形容詞よりも転移容認度において有意に高い値を示したのは、9 対であった。逆に、有標形容詞が無標形容詞よりも転移容認度において有意に高い値を示した例はみられなかった。また、無標形容詞を使用したの表現のうち、転移できるとする「肯定的評価」が転移できないとする「否定的評価」を上回ったのは 20 通り中 12 通りであったのに対し、有標形容詞の場合は、5 通りのみであった。

この結果から、無標表現は有標表現よりも言語間の共通概念として認知されやすい傾向にあるという、言語転移に関する 1 つの知見が得られた。

Abstract

Aotani(2008) framed a hypothesis that Japanese learners of English tend to regard Japanese expressions with unmarked adjectives as more transferable to English than ones with marked adjectives. The aim of this study is to verify the hypothesis by administering language transferability tests to 164 Japanese learners of English. They were divided into two groups. Group A were given 20 Japanese expressions which

contained 4 kinds of unmarked adjectives: 'fukai' (*deep*), 'hiro' (*broad*), 'akarui' (*bright*), and 'tsuyoi' (*strong*). Group B were given 20 Japanese expressions which contained 4 kinds of marked adjectives: 'asai' (*shallow*), 'semai' (*narrow*), 'kurai' (*dark*), and 'yowai' (*weak*). They were instructed to make a judgment as to whether the given expressions could be transferable into English.

According to the comparison of the results between Group A and B, 9 unmarked expressions out of 20 showed significantly higher transferability scores than the marked expressions. No marked expressions showed significantly higher transferability scores than the unmarked expressions. According to critical ratio analysis, 12 unmarked expressions out of 20 were judged as transferable to English, while only 5 marked expressions out of 20 were judged as transferable to English.

These results showed some unmarked expressions were regarded as 'linguistic universals' common to other languages, rather than as 'language specific'. The significance of applying this finding to the vocabulary learning environment was discussed.

1. はじめに

「重い—軽い」、「深い—浅い」などの測定可能な数量に関連する形容詞は通常意味の上で対立する対の概念を持つが、それらの対概念が仮に我々の心的語彙の中で対称の形で存在するとすれば、対の一方の持つ意味範囲ともう一方の持つ意味範囲も対称的であると認知されているはずである。日常の母語による言語行動の中でそれが意識されることはほとんどないであろうが、あらためて問われれば、「重い気分」という表現がされれば「軽い気分」はその逆の概念を表すし、「深い考え」という表現がされれば「浅い考え」はその逆の概念を表すということに異議を唱える人はいないであろう。しかし、これらの形容詞対の場合、対立する対概念は言語学的には対等ではなく、対になっているうちの、先にあるものが意味的に無標、後にあるものが有標であるとされているⁱ。無標とは特別な理由がなければ当然のこととして期待されるような、普通の表現の意味構造であり、一方、有標とは特別な理由のために、他の意味的要素が無標の意味に付加された構造を意味する。しかし、この相違がわれわれの心的語彙の中でどのように認知されているのかについて、母語による言語行動の中で明らかにするのは困難であるといえる。

一方、外国語の学習においては、母語の知識を対象言語にも適用しようとする言語転移が認められることが多いが、学習者は母語のルールがそのまますべて適用できるとは考えず、選択的に適用しようとする。特に語彙の転移に関しては、慎重になる傾向が強い (Kellerman, 1977, 1978)。したがって、語彙に関する言語転移がどのように起こるかを分析することが、心的語彙の構造を解明する手がかりになると考えられる。

青谷(2008)では、日本人が外国語を学習する際の、母語から対象言語への意味の転移容認度について、形容詞対「重いー軽い」を対象とした調査を行った。それらを含む日本語の表現が英語にも転移可能と考えるかどうかについて分析した結果、「重い」と「軽い」の転移容認度には有意な差が認められるという知見が得られた。また、その要因として、①ある名詞が形容詞と共に共起する場合、その形容詞のその名詞に対する無標性が高いほど、転移容認度が高くなる、②無標性が低い場合は、ある表現が表す意味内容がよりポジティブなものの方がネガティブなものよりも転移容認度が高くなる、という仮説を導き出した。

2. 目的

測定可能な数量に関連する形容詞対「深いー浅い」「広いー狭い」「明るいー暗い」「強いー弱い」について、それらを含む日本語の表現が英語にも適用できるかどうか、その転移容認度について調査を行い、上記①の仮説、すなわち形容詞の無標性が転移容認度を決定する要因のひとつであるかどうかについての検証を行なう。

転移容認度は、ある表現がその言語に特有のものであると認知されたときには低くなり、逆に、言語間に共通の概念であると認知された場合には高くなる。無標表現の転移容認度が有標表現を上回れば、本仮説が支持されることとなり、「無標ー有標」の形容詞対が心的語彙上異なった処理をされており、無標表現が有標表現よりも一般性の高い表現であると認知されているという知見が得られる。逆に、有標表現の転移容認度が無標表現を上回った場合、その逆の知見が得られる。また、無標・有標の転移容認度に差が無い場合および形容詞ごとに異なった傾向が認められた場合は、無標性・有標性は転移容認度を決定づける要因ではないという知見が得られる。

3. 調査の方法

3.1 調査対象および調査時期

愛知県内のA高校ⁱⁱの生徒164名(男94名、女70名)に対し、質問紙による調査を行った。調査は2005年2月に行った。

3.2 調査の内容

対象者をAグループ(男43名、女39名)とBグループ(男51名、女31名)のそれぞれ82名ずつの2つのグループに分け、Aグループには「深い」「広い」「明るい」「強い」の4種類の

表1:アンケートA・Bの表現リスト
アンケートA アンケートB

「深い」	「浅い」
意味	意味
構造	構造
考え	考え
知識	知識
友情	友情
「広い」	「狭い」
意味	意味
見解	見解
解釈	解釈
経験	経験
心	心
「明るい」	「暗い」
顔	顔
性格	性格
雰囲気	雰囲気
未来	未来
見通し	見通し
「強い」	「弱い」
態度	態度
願望	願望
興味	興味
意志	意志
影響	影響

無標形容詞を含むそれぞれ5通りの表現例を提示し、「深い」「広い」「明るい」「強い」の部分がそれぞれ ‘deep’, ‘wide’, ‘bright’, ‘strong’ で置き換えても表現可能かどうかについて判断させた。一方、Bグループには「浅い」「狭い」「暗い」「弱い」の4種類の有標形容詞を含むそれぞれ5通りの表現例を提示し、「浅い」「狭い」「暗い」「弱い」の部分がそれぞれ ‘shallow’, ‘narrow’, ‘dark’, ‘weak’ で置き換えても表現可能かどうかについて判断させた。

判断の尺度は「表わせる(1点)」「たぶん表わせる(2点)」「たぶん表わせない(3点)」「表わせない(4点)」の4段階評定を用いた。時間制限は行なわなかった。

表1は今回の調査で使用した表現を挙げたものであるが、いずれの表現も形容詞が基本義によって使用されている表現ではなく、比喩的拡張のプロセスを経て慣用的に定着している表現を使用した。これらの表現はすべて英語での置き換えが可能である。

4. 結果と分析

4.1 転移容認度の比の差

4.1.1 無標形容詞の場合

転移容認度に関するアンケートAの結果において、「1.表せる」「2.たぶん表せる」と回答されたものを「肯定的判断」、「3.たぶん表せない」と「4.表せない」と回答されたものを「否定的判断」としてまとめ、「肯定的判断」と「否定的判断」との比率の差が有意であるかどうかについて臨界比による検定を行なったところ、表2のような結果を得た。

「肯定的判断」の比率が有意に高かったものは、1%水準で順に「強い意志」「深い意味」「広い心」「明るい性格」「明るい未来」「深い友情」「深い考え」「明るい雰囲気」「強い態度」「明るい顔」「広い意味」の11項目であり、5%水準で「広い解釈」の1項目であった。

一方、「否定的判断」の比率が有意に高かった項目はなかった。

表2: 無標形容詞の転移容認性の比の差

	肯定的 評価(%)	否定的 評価(%)	CR
(1)深い意味	82.72	17.28	5.78**
(2)深い構造	46.34	53.66	0.55
(3)深い考え	76.25	23.75	4.58**
(4)深い知識	61.25	38.75	1.90
(5)深い友情	76.54	23.46	4.67**
(6)広い意味	67.07	32.93	2.98**
(7)広い見解	53.09	46.91	0.44
(8)広い解釈	61.73	38.27	2.00*
(9)広い経験	53.09	46.91	0.44
(10)広い心	82.72	17.28	5.78**
(11)明るい顔	69.51	30.49	3.42**
(12)明るい性格	76.83	23.17	4.75**
(13)明るい雰囲気	75.31	24.69	4.44**
(14)明るい未来	76.83	23.17	4.75**
(15)明るい見通し	48.78	51.22	0.11
(16)強い態度	73.17	26.83	4.09**
(17)強い願望	60.49	39.51	1.78
(18)強い興味	57.32	42.68	1.21
(19)強い意志	82.93	17.07	5.85**
(20)強い影響	60.98	39.02	1.88

* $p < .05$, ** $p < .01$

4.1.2 有標形容詞の場合

転移容認度に関するアンケートBの結果において、「肯定的判断」と「否定的判断」との比率の差が有意であるかどうかについて臨界比による検定を行なったところ、表3のような結果を得た。

「肯定的判断」の比率が有意に高かったものは、1%水準で順に「暗い雰囲気」「弱い意志」の2項目、5%水準で「暗い顔」「浅い考え」「浅い知識」の3項目であった。

一方、「否定的判断」の比率が有意に高かったのは5%水準で「浅い友情」1項目のみであった。

4.2 無標性・有標性による転移容認度の比較

4.2.1 「深い」－「浅い」の比較

表4は「深い」と「浅い」のそれぞれの得点について *t* 検定を行った結果を示したものである。「意味」($t(156.69)=4.62, p<.001$) および「友情」($t(161)=4.82, p<.001$) において「深い」よりも「浅い」の方が有意に高い得点を示していた。「構造」($t(161)=1.11, n.s.$)、「考え」($t(156.82)=1.66, n.s.$)、「知識」($t(160)=0.04, n.s.$)、については有意な差は認められなかった。

表4: 「深い」「浅い」の平均値とSDおよび*t*検定の結果

	深い		浅い		<i>t</i> 値
	平均	SD	平均	SD	
意味	1.75	0.83	2.41	0.99	4.62***
構造	2.48	0.98	2.64	0.93	1.11
考え	1.99	0.77	2.21	0.91	1.66
知識	2.28	0.97	2.28	0.91	0.04
友情	1.98	1.00	2.72	0.97	4.82***

*** $p<.001$

4.2.2 「広い」－「狭い」の比較

表5は「広い」と「狭い」のそれぞれの得点について *t* 検定を行った結果を示したものである。「心」($t(161)=4.66, p<.001$) および「意味」($t(162)=2.55, p<.05$) において「広い」よりも「狭い」の方が有意に高い得点を示していた。「見解」($t(161)=1.81, n.s.$)、「解釈」($t(159)=1.87, n.s.$)、「経験」($t(160)=1.83, n.s.$)、については有意な差は認められなかった。

表3: 有標形容詞の転移容認性の比の差

	肯定的 評価(%)	否定的 評価(%)	CR
(1)浅い意味	56.10	43.90	0.99
(2)浅い構造	39.51	60.49	1.78
(3)浅い考え	63.41	36.59	2.32*
(4)浅い知識	63.41	36.59	2.32*
(5)浅い友情	35.37	64.63	2.54*
(6)狭い意味	46.34	53.66	0.55
(7)狭い見解	42.68	57.32	1.21
(8)狭い解釈	43.75	56.25	1.01
(9)狭い経験	41.98	58.02	1.33
(10)狭い心	53.66	46.34	0.55
(11)暗い顔	64.63	35.37	2.54*
(12)暗い性格	50.00	50.00	-0.11
(13)暗い雰囲気	83.75	16.25	5.93**
(14)暗い未来	59.76	40.24	1.66
(15)暗い見通し	43.90	56.10	0.99
(16)弱い態度	57.32	42.68	1.21
(17)弱い願望	43.90	56.10	0.99
(18)弱い興味	40.24	59.76	1.66
(19)弱い意志	67.07	32.93	2.98**
(20)弱い影響	52.44	47.56	0.33

* $p<.05$, ** $p<.01$

表5: 「広い」「狭い」の平均値とSDおよびt検定の結果

	広い		狭い		t 値
	平均	SD	平均	SD	
意味	2.12	0.93	2.51	1.02	2.55*
見解	2.38	0.90	2.63	0.87	1.81
解釈	2.27	0.91	2.54	0.90	1.87
経験	2.42	0.86	2.68	0.93	1.83
心	1.80	0.84	2.45	0.93	4.66***

* $p < .05$, *** $p < .001$

4.2.3 「明るい」－「暗い」の比較

表6は「明るい」と「暗い」のそれぞれの得点についてt検定を行った結果を示したものである。「性格」($t(160)=4.01$, $p < .001$)において「明るい」よりも「暗い」の方が有意に高い得点を示していた。「顔」($t(162)=1.23$, $n.s.$)、「雰囲気」($t(159)=0.99$, $n.s.$)、「未来」($t(162)=1.71$, $n.s.$)、「見通し」($t(162)=0.39$, $n.s.$)については有意な差は認められなかった。

表6: 「明るい」「暗い」の平均値とSDおよびt検定の結果

	明るい		暗い		t 値
	平均	SD	平均	SD	
顔	1.98	0.94	2.16	0.96	1.23
性格	1.82	0.88	2.39	0.93	4.01***
雰囲気	1.88	0.95	1.74	0.82	0.99
未来	2.04	0.94	2.28	0.89	1.71
見通し	2.55	1.03	2.61	0.97	0.39

*** $p < .001$

4.2.4 「強い」－「弱い」の比較

表7は「強い」と「弱い」のそれぞれの得点についてt検定を行った結果を示したものである。「願望」($t(161)=3.47$, $p < .001$)、「興味」($t(154.34)=2.95$, $p < .001$)、「意志」($t(162)=3.11$, $p < .001$)、「態度」($t(162)=2.85$, $p < .01$)において「強い」よりも「弱い」の方が有意に高い得点を示していた。「影響」($t(162)=0.72$, $n.s.$)、については有意な差は認められなかった。

表7: 「強い」「弱い」の平均値とSDおよびt検定の結果

	強い		弱い		t 値
	平均	SD	平均	SD	
態度	1.99	0.97	2.40	0.89	2.85**
願望	2.07	0.96	2.57	0.88	3.47***
興味	2.24	1.03	2.67	0.82	2.95***
意志	1.74	0.80	2.17	0.95	3.11***
影響	2.34	1.03	2.45	0.92	0.72

** $p < .01$, *** $p < .001$

5. 考察

本研究では、日本人英語学習者の母語から対象言語への意味の転移容認度の差について、形容詞の無標性・有標性という観点から分析を行なった。本研究で扱った4対の形容詞を使用した20対の表現のうち、無標形容詞が有標形容詞よりも転移容認度において有意に高い値を示したのは、「深い／浅い意味」、「深い／浅い友情」、「広い／狭い意味」、「広い／狭い心」、「明るい／暗い性格」、「強い／弱い態度」「強い／弱い願望」「強い／弱い興味」「強い／弱い意志」の9対であり、すべての形容詞対にまたがっている。また、有意差は認められなかったものの、他の表現についても、無標表現が有標表現よりも高い転移容認度を示す傾向が認められている。逆に、有標形容詞が無標形容詞よりも転移容認度において有意に高い値を示した例はみられなかった。

また、無標形容詞を使用したの表現のうち、転移できるとする「肯定的評価」が転移できないとする「否定的評価」を上回ったのは20通り中12通りであったのに対し、有標形容詞の場合は、5通りのみであった。

本研究で扱った表現は数多くある形容詞の一部を使用したものであり、今回得られた結果からのみ断定することは避けなければならないが、無標形容詞の転移容認度は有標形容詞のそれを上回る傾向があること、すなわち、青谷(2008)で提起した仮説①「ある名詞が形容詞と共に起る場合、その形容詞のその名詞に対する無標性が高いものほど、転移容認度が高くなる」は支持されたと考えられる。それは無標性の表現が、それぞれの言語に特有の表現であるというより、どの言語にも共通して存在する概念を表すという認知がなされる傾向にあることを意味している。

言語学習も含め、すべての学習は既知の知識体系を未知のことがらにあてはめることによってなされる(Neuner, 1992)。外国語の学習においては、母語と対象言語との言語的距離が近い場合には、母語の知識を対象言語の学習に利用することで、言語習得は促進されるし、言語学習にかかる労力、時間も節約することができる。しかし、日本語と英語のような言語的距離の大きい言語間関係は「ゼロ関係」とされており(Ringbom, 2007)、母語の知識体系を利用することは無意味であるように捉えられがちである。その意味で日本人英語学習者は非常に不利な学習環境に置かれているといえる。

しかし「ゼロ関係」とは、実は、2つの言語間に全く共通点がないことを意味するのではなく、共通点が一見してもわからないほど抽象的な、認知的なレベルに存在するため、初歩的な学習者には認識できないという状況を意味している。事実、本研究で扱った無標・有標形容詞を含む、合わせて40通りの表現はすべて日本語から英語への転移が可能である。しかし、学習者が2言語間の距離の隔たりを認識すればすればするほど、言語転移は起きにくくなる(Kellerman, 1977, 1978; 青谷 2003ab, 2004, 2008)。

言語転移には認知レベルでの意味類推のプロセスが関わっている。本研究で行なった調査のように、タスクとして転移容認度を判断させると、学習者は類推を行い、選択的に容認度を判断す

ることになる。その類推傾向は、学習者の心的語彙の構造を解明する手がかりになり、日本語の知識を英語学習に効率的に利用する方法を研究するための有効な知見となり得る。

本研究により、無標表現が言語間の共通概念として認知されやすい傾向にあるという、言語転移に関する1つの知見が得られたが、このように語彙の認知構造に関する知見を積み上げていくことにより、より効率的な語彙習得が可能になると考えられる。「ゼロ関係」にある言語を学習しなければならない日本人英語学習者の心理的負担は大きく、母語の知識体系がほとんど利用できないと考える傾向の強い学習者は、英語の習熟度がかなりの水準まで達しなければ英語での表現はできないと思込み、英語を使うことに対して極めて消極的になりがちである。

今後は、これまでの研究で得られた知見に基づき、語彙習得に関して、学習者に言語転移の有効性を認識させることを可能にするような学習プログラムの開発 (Aotani & Kameyama, 2008) を進めていく予定である。

参考文献

- 青谷法子. (2003a). 「第二言語学習者における語彙ネットワークの拡張に関する心理言語学的研究」. 中部地区英語教育学会紀要、33号. pp9-16.
- 青谷法子. (2003b). 「形容詞「重い」の意味ネットワークに関する心理言語学的研究」. 東海学園大学研究紀要、第8巻、第2号. pp51-67.
- 青谷法子. (2004). 「形容詞「重い」の意味類推についての研究」. 東海学園大学研究紀要、第9号 (分冊2). pp67-80.
- 青谷法子. (2008). 「「計量」形容詞対における言語転移容認度の比較研究」. 東海学園大学研究紀要、第13号 (シリーズB). pp3-14.
- Aotani, N. and Kameyama, T. (2008). Development of a CALL Program to Improve Learner's Analytical Approach to the Polysemous Senses of L2 Adjectives. *Proceedings of WorldCALL 2008*. (<http://www.j-let.org/~wcf/modules/tinyd12/>)
- Kellerman, E. (1977). Towards a Characterization of the Strategy of Transfer in Second Language Learning. *Interlanguage Studies Bulletin* 2/1. pp53-145.
- Kellerman, E. (1978). Transfer and non-transfer: where we are now. *Studies in Second Language Acquisition* 2. pp37-57
- Neuner, G. (1992). The Role of Experience in a Content- and Comprehension-Oriented Approach to Learning a Foreign Language. In P. J. L. Arnaud and H. Bejoint (eds.) *Vocabulary and Applied Linguistics* (pp. 156-166). London: Macmillan.
- Quirk, R. et al. (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*, London/New York: Longman
- Ringbom, H. (2007). *Cross-linguistic Similarity in Foreign Language Learning*. Multilingual Matters Ltd.

-
- i 例えば「その荷物の重さはどれくらいですか？」という質問は可能であるが、「その荷物の*軽さはどのくらいですか？」という質問は特別な理由がなければ意味的容認度は低い(Quirk *et al.* 1985)。このような無標-有標の形容詞対には他に「長い-短い」「高い-低い」「古い-新しい」などがある。
- ii 青谷(2003, 2008)での調査実施校と同一であるが、調査対象は重複していない。